



## キッズリサーチスタート

八月十二日朝八時、三宅小学校の入り口に看板が立った。その看板には寺子屋の白い文字。そう、今年も三宅島大学キッズリサーチがスタートしたのだ。

二年目となる今回の開催期間は八月十二日～十八日の七日間。午前中は三宅小学校や三宅中学校で子どもたちと夏休みの宿題に取り組み、午後は御藏島会館を拠点に日替わりでワーク

ショップを開催する。

初日の午前は二人の小学生が会場となる三宅小学校に訪れ、各自の宿題を

進めた。算数でわからないものがあつたり漢字の書き順を間違えていたりす

ると、隣に座る大学生がアドバイスを

するなどして一学期の復習を行つてい

く。最初は顔に緊張の色が見えた二人であつたが、休憩時間に話をする内に少しずつ笑顔が見え始め、会話を弾ん

だ。午後は、ワークショップの手始めとして五人の小学生と折り紙やペンを

使用して世界で一枚のオリジナル名札を作つた。その次に、自分の名前のある

いうえお作文で自己紹介文を作り、他

人の紹介を互いに作り合つたりした。そうしている内にあつという間に終了の時間となつてしまい、子どもたちは帰路についた。

二日目の午前は六人の小学生が勉強をする為、三宅中学校の集会室に集つた。宿題を進めていくのは昨日同様で、休憩時間にはデジタルカメラで写真を撮つて遊ぶ姿も見受けられた。午後に



2013年  
(平成25年)  
8月14日  
水曜日

あしたばん編集部  
発行所: 加藤文俊研究室  
info@ashitaban.net  
http://ashitaban.net/

第四十号



## 三宅島大学

### 卒業生誕生か



く子等、個性豊かなものが完成しカラフルな名札を各々の胸につけていた。絵に関してみても、私たちが決してしないような色の混ぜ方や大胆な塗り方をしたりと、何事にも全力でエネルギーを注ぐ様子が見られ、見ているこちら側が圧倒されてしまう程であつた。一つ一つの言葉や行動の純粹さに驚くとともに、いつの間にか自分がなくしてしまったものを一つ一つ再確認している気分になつた。

(林野友香)

は八人の小学生が御藏島会館に訪れ、十年後の三宅島をテーマに絵具やカラーペン、クレヨンを使って大きな模造紙に絵を描いた。後半には全員で錆ヶ浜の海岸まで足をのばし貝殻や海藻を採集して、模造紙を装飾した。

二日間の活動を通して感じたことは子どもたちの溢れんばかりのエネルギーである。それは体力に限つた話でなく、身体全体で表現する力や発想力からも見て取れる。名札を作成した時は、皆に描いてもらった似顔絵を貼る子や海の生き物の絵を色とりどりに描

ます大学卒業というと、最終成果物としての卒業制作が必須単位となつてが誕生しようとしている。その記念となる第一回はころつちさんこと田中耕介さんである。

ついに三宅島大学に初めての卒業生が誕生しようとしている。その記念となる第一回はころつちさんこと田中耕介さんである。

まず大学卒業というと、最終成果物としての卒業制作が必須単位となつてくる。既に一一単位を取得し、最終成果物の制作に取り掛かつたばかりの彼に、今の心境を窺つてみた。すると、とても率直な応えが返つて来た。それだけではなく、先生として講義を持つだけではなく、先生として講義を持つ経験もあり、両方の立場で三宅島大学に関わっている。そんな彼にとって、現段階では今年の九月に彼の卒業式を行う予定で、卒業制作はその後も進められるよう。今から『三宅島の虹』制作でありながら島全体の共同制作になるのだ。

現段階では今年の九月に彼の卒業式を行つて、卒業制作はその後も進められるよう。今から『三宅島の虹』制作でありながら島全体の共同制作になるのだ。

(吉田あんな)

## 熱気に包まれた盆踊り

日中の刺さるような太陽が傾き少し涼くなつてくると、軽快な祭りばやしが聞こえてきた。昨日から一日間、阿古地区青年団主催の阿古地区盆踊りが三宅島漁業協同組合駐車場にて開催される。



駐車場の中央にはこの土日で用意された櫓が立つておおり、温かい光の提灯が並ぶ。和太鼓が身体に響き、胸が弾む。お盆であるこの時期は、学校や仕事が休みの人々と共に、島に帰省してきた人々も合わせて賑わいを見せる。午後六時から始まつたお祭りは七時半近くになると、盛り上がりのピークを迎える、八時になると伝統の阿古獅子舞が披露された。間近で見るととても迫力があり、今年から新しくマイム・マイムが加わったそうだ。小さな子供からご高齢の方までみんなが輪になり、音に合わせて盆踊りを踊る。私も一緒に輪に混ざり、踊り方を周りの人に教えてもらひながら踊つた。その輪の中で水色地に金魚柄の浴衣を着て始めから終わりまで完璧な踊りをしている女の子がいた。話を聞いてみると、彼女は毎年この盆踊りに参加しているらしい。全てが終わつた直後、このお祭りの何が一番樂しいか尋ねると「これです」というとてもシンプルな一言が返ってきた。しかし、この一言の中にお祭りの魅が全て詰まつていると感じた。一緒に踊り盛り上がることでわかる一体感や高揚感。始めから終わりまで

涼くなつてくると、軽快な祭りばやしが聞こえてきた。昨日から一日間、阿古地区青年団主催の阿古地区盆踊りが三宅島漁業協同組合駐車場にて開催される。

力があり、大人でも迫つてくると驚いて思わず身体を引いてしまうほどである。この獅子舞に頭を噛まれるが災いを防ぎ健康な身体になれるといわれ、小さな子供達が親に抱えられ、泣きながら頭を噛んでもらつていた。他にも老若男女問わず、獅子舞に駆け寄つていく姿が多く見られた。

この盆踊りでは、定番の炭坑節から子供向けのアンパンマン音頭、また新三宅島音頭など曲は全部で十三曲もあり、今年から新しくマイム・マイムが加わったそうだ。小さな子供からご高齢の方までみんなが輪になり、音に合わせて盆踊りを踊る。私も一緒に輪に混ざり、踊り方を周りの人に教えてもらひながら踊つた。その輪の中で水色地に金魚柄の浴衣を入れた水に手を入れて魚をあつかわなくちやいけない、暖房もつけられないし」と、苦労話を語つてくれたのは友達の誘いがきっかけで働き始めて七年目となる青沼恵子さんだ。お魚センターでは、ただ魚を売るだけではなく、民宿や地域の各家庭に魚を供給しているだけあって地域の方々との関わりも深い。離れた地区から他の用事でバスに乗つてきたおばあちゃんが、ふらつと顔を出しておしゃべりをしにきたり、民宿の女将さんや主婦の方々と魚料理の話で盛り上がることもあるとう。「最近では、若い方が色々な魚の味付けや食べ方を考案していて、新たな発見がたくさんある」と語つてくれ、更に「以前はただレジでお魚を売るだけだったけれども、少し前からお

(大川朝子)

## 海から食卓へ



豊かな海に囲まれた三宅島、この地で今も昔も変わらずにずっと島民の食生活に欠かせない食材である魚、今はその魚を取り扱つていていきお魚センターで取材を行つてきた。お魚センターには、島の漁師さんが定置網を使い、樽に詰めた魚や一本釣り釣つた新鮮な魚がたくさん届けられる。その魚をその場で売つたり、民宿や島のスーパーに届けたりするなど、島で口にされる魚のほとんどはここを経由している。

「魚が傷んじやうから冬場でも氷を入れた氷に手を入れて魚をあつかわなくちやいけない、暖房もつけられないし」と、苦労話を語つてくれたのは友達の誘いがきっかけで働き始めて七年目となる青沼恵子さんだ。お魚センターでは、ただ魚を売るだけではなく、民宿や地域の各家庭に魚を供給しているだけあって地域の方々との関わりも深い。離れた地区から他の用事でバスに乗つてきたおばあちゃんが、ふらつと顔を出しておしゃべりをしにきたり、民宿の女将さんや主婦の方々と魚料理の話で盛り上がることもあるとう。「最近では、若い方が色々な魚の味付けや食べ方を考案していて、新たな発見がたくさんある」と語つてくれ、更に「以前はただレジでお魚を売らせることがすごく大切。前回の講座

## 一〇〇人先生、 折り返し地点

店が忙しくなければ鱈を取つて、三枚にシしてお魚の事について語れること、当たり前のことだけだと実はそれが一番嬉しいんだよね」。

(長富将成)

## 折り返し地点

(昨年の十一月から今年の三月までの三ヶ月間)

ではIP告知だと島内に伝わりづらいことが分かつた。なので、チラシやスーパーへの貼り出しで告知するなど、色んな人が興味を持つよう環境作りをしている。そして、参加の行動に移してもらう。現状として島内よりは島外からの参加者が多い分、今度は島民に来てもらうためにどうすればいいのかを考え、授業を作つてみたい」と語つた。

前回では半分の五〇人分の講座が終わり、今回は二五人分開講される。今冬に残りの二五人分が予定されているので、それが終われば一〇〇人の目標が達成されることになる。折り返しとなるこの機会に、参加したことのある方もない方も、足を運んでみてはいかがだろうか。

(深澤匠)

